



パック連通信

事務局：山梨県大月市御太刀 1-2-10

No.138 2025年8月20日発行
全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

TEL 0554-22-3611

全国パック連 40 年を振り返る

1992 年に起こったピンチ説及び論議！

全国へと急ピッチに広がった牛乳パック再利用運動ですが、1992 年にはピンチ説や、牛乳パックリサイクルは環境を破壊するなどの学識者による論説がマスコミに取り上げられました。

世界的なパルプ市況の低下、それを原料とするパルプメーカーの攻勢で、これまでトイレットペーパーは再生紙 8 対パルプ 2 であったのが、パルプもの 4 割を占めるようになってきました。

1992 年 2 月 20 日、21 日付けの公明新聞には「牛乳パックリサイクルピンチ！」と大々的なタイトルで取り上げられてしまい、各地の回収運動に影を落としました。

こうした状況を受け、牛乳パックの受け入れ製紙メーカーと主要な市民グループにより、「牛乳パック再利用製品利用拡大作業委員会」（1992 年 1 月～7 月）を発足し、全国 1000 人対象とした再生紙の利用実態調査や全国 500 店のスーパー・小売店の聞き取り調査に乗り出しました。調査を踏まえて消費者は牛乳パックの回収には協力しているが再生品の購入まで意識が伴っていない、販売店は店頭回収をしているが、再生品の販売比率は低いということが判明し、「集める・使う」の目印である牛乳パック再利用マーク誕生へのきっかけとなりました。

公明新聞 1992.2/20 朝刊第一版(1頁)1800円

レポート

牛乳パックのリサイクルが——ピンチ！

価格低迷

再生メーカーは在庫過剰

メモ

パルプ価格低下が追打ち

牛乳パックのリサイクルは、全国的に広がっていますが、1992 年には「ピンチ」といわれる状況に陥りました。これは、世界的なパルプ市況の低下、それを原料とするパルプメーカーの攻勢、再生紙の価格低迷、再生メーカーの在庫過剰、そして、牛乳パックのリサイクルが環境を破壊するなどの学識者による論説がマスコミに取り上げられたことが原因です。

全国的に広がった牛乳パック再利用運動ですが、1992 年には「ピンチ」といわれる状況に陥りました。これは、世界的なパルプ市況の低下、それを原料とするパルプメーカーの攻勢、再生紙の価格低迷、再生メーカーの在庫過剰、そして、牛乳パックのリサイクルが環境を破壊するなどの学識者による論説がマスコミに取り上げられたことが原因です。

レポート

牛乳パックのリサイクルが——ピンチ！

課題山積

再生品の需要拡大がカギ

問われる行政の指導性

リサイクル研究グループ「ガイア」の集いでも、現状打開策について熱心な話し合いが行われた（東京都江戸川区の鶴見区民センター）

牛乳パックのリサイクルは、全国的に広がっていますが、1992 年には「ピンチ」といわれる状況に陥りました。これは、世界的なパルプ市況の低下、それを原料とするパルプメーカーの攻勢、再生紙の価格低迷、再生メーカーの在庫過剰、そして、牛乳パックのリサイクルが環境を破壊するなどの学識者による論説がマスコミに取り上げられたことが原因です。

またこの年の7月、理化学研究所研究員の植田敦氏が「環境保護運動はどこが間違っているか」を出版し3万部を超え注目を浴びました。主張は「リサイクルも環境を汚染する、分別収集は燃やさない物を蓄積するだけで、捨て場が枯渇する」「牛乳パックの回収は古紙製のトイレットペーパーのシェアを圧縮するだけで原料パルプの使用を減らすことにはならず、森林保護に役立つと考えるのは間違い。再生にはコストがかかり過ぎ、品質も悪い。だから競争力もない。」「牛乳パックをリサイクルする際に大量の化学薬品を使い、ラミネートをはがせば大量の廃棄物が生まれる。紙を漂白する段階で大量の塩素を使う。」というものでした。これに対し、大阪大学の森住明弘氏（現 関西ミルクロードの会代表）は、月刊誌「リサイクル文化」などを通じて「植田さんの主張には事実誤認が多く、市民運動を混乱させる。」「パルプ製品と再生製品の価格差は縮まってはいるが、実際牛乳パックの再生紙はパルプものより安い、芯なしロールは生協の主力商品にもなっており競争力は十分にある。」「紙パックやアルミ缶の利用が増えたのは、リサイクルできるからではなく瓶よりも軽く使い捨てしやすいからという実用的な理由から。牛乳パックの回収を通じて、環境問題に関心のなかった主婦らに目を向けさせ、暮らしの中で仕組みを勉強することから始まった運動だ。」と反論しています。改めて当時の記事に目を通すと、植田氏は運動当事者や受け入れ製紙会社に事実確認を全く行っていない随分乱暴な主張だったように思いますが、以降も注目を浴びることが目的のようなこうした主張を投げかける学識者が時々出てきていました。

1992年(平成4年)12月3日 木曜日

享月

日

第17

第17

家庭

牛乳パック回収は間違いか

京都 リサイクル運動巡り討論集会

「リサイクル運動は本当に間違っているのか」をテーマにした討論集会が十一月二十九日、京都の京大生協で開かれた。牛乳パックは回収するが燃やした方が環境にいい、疑問を投げかけた特定人理化学研究所(埼玉和光市)研究員の植田敦さん(五十)と、関西でパック回収運動などに取り組む大阪大基礎工学部助手の森住明弘さん(五十)が、対決。市民グループや生協関係者ほか、製紙業者や自治体関係者も見守る中で激論を交わした。

この集会は、京都の学生たちのグループ「リサイクル研究」が企画した。植田さんは七月、著書『環境保護運動はどこ間違っているのか』(エッセイ出版)を出し、「リサイクルも環境を汚染する」「分別収集は燃やさない物を蓄積するだけで、捨て場が枯渇する」「牛乳パックの回収は古紙製のトイレットペーパーのシェアを圧縮するだけで原料パルプの使用を減らすことにはならず、森林保護に役立つと考えるのは間違い。再生にはコストがかかり過ぎ、品質も悪い。だから競争力もない。」「牛乳パックをリサイクルする際に大量の化学薬品を使い、ラミネートをはがせば大量の廃棄物が生まれる。紙を漂白する段階で大量の塩素を使う。」というものでした。これに対し、大阪大学の森住明弘氏(現 関西ミルクロードの会代表)は、月刊誌「リサイクル文化」などを通じて「植田さんの主張には事実誤認が多く、市民運動を混乱させる。」「パルプ製品と再生製品の価格差は縮まってはいるが、実際牛乳パックの再生紙はパルプものより安い、芯なしロールは生協の主力商品にもなっており競争力は十分にある。」「紙パックやアルミ缶の利用が増えたのは、リサイクルできるからではなく瓶よりも軽く使い捨てしやすいからという実用的な理由から。牛乳パックの回収を通じて、環境問題に関心のなかった主婦らに目を向けさせ、暮らしの中で仕組みを勉強することから始まった運動だ。」と反論しています。改めて当時の記事に目を通すと、植田氏は運動当事者や受け入れ製紙会社に事実確認を全く行っていない随分乱暴な主張だったように思いますが、以降も注目を浴びることが目的のようなこうした主張を投げかける学識者が時々出てきていました。



リサイクル運動は本当に間違っているのか
植田敦 vs. 森住明弘

疑問派 森住明弘氏
推進派 環境問題に目向く

この集会は、京都の学生たちのグループ「リサイクル研究」が企画した。植田さんは七月、著書『環境保護運動はどこ間違っているのか』(エッセイ出版)を出し、「リサイクルも環境を汚染する」「分別収集は燃やさない物を蓄積するだけで、捨て場が枯渇する」「牛乳パックの回収は古紙製のトイレットペーパーのシェアを圧縮するだけで原料パルプの使用を減らすことにはならず、森林保護に役立つと考えるのは間違い。再生にはコストがかかり過ぎ、品質も悪い。だから競争力もない。」「牛乳パックをリサイクルする際に大量の化学薬品を使い、ラミネートをはがせば大量の廃棄物が生まれる。紙を漂白する段階で大量の塩素を使う。」というものでした。これに対し、大阪大学の森住明弘氏(現 関西ミルクロードの会代表)は、月刊誌「リサイクル文化」などを通じて「植田さんの主張には事実誤認が多く、市民運動を混乱させる。」「パルプ製品と再生製品の価格差は縮まってはいるが、実際牛乳パックの再生紙はパルプものより安い、芯なしロールは生協の主力商品にもなっており競争力は十分にある。」「紙パックやアルミ缶の利用が増えたのは、リサイクルできるからではなく瓶よりも軽く使い捨てしやすいからという実用的な理由から。牛乳パックの回収を通じて、環境問題に関心のなかった主婦らに目を向けさせ、暮らしの中で仕組みを勉強することから始まった運動だ。」と反論しています。改めて当時の記事に目を通すと、植田氏は運動当事者や受け入れ製紙会社に事実確認を全く行っていない随分乱暴な主張だったように思いますが、以降も注目を浴びることが目的のようなこうした主張を投げかける学識者が時々出てきていました。

生協はコストがかなり過ぎ、品質も悪い。だから競争力もない。」「牛乳パックは今の酒や米、油などにも使われる。「リサイクルできるからいい」と必要拡大につなげた。さらに、市民が得意で回収運動を進めたことで、古紙業者がつぶれていく。市民運動には二種類ある。「良いことをやる(会せよ)」と「悪いことをしない(させない)」。運動で「良いことをする」というのは、かつて「正義のための戦争」がそうであったように、良いことではないとわかった時には回復が難しい。リサイクル運動の善悪は定かでないが、ゴルフ場や残留農薬、原発を、より大事は「させない」運動に向かっている。

森住さんの主張
シニアの拡大を目的に、大手製紙会社がダイニングする。新しい紙と再生紙との価格差は縮まってきたが、トイレットペーパーなど牛乳パックの再生紙は現実にはパルプ製より安い。パック利用の本(じん)なしロールは生協の主力商品にならず、競争力は十分ある。古紙回収業者が減ったのはリサイクル運動が広がったせいではなく、古紙価格が下がって休止している人が多いからである。

紙パックや缶の利用が増えるのは、「リサイクルできる」からではない。瓶よりも「軽く、使い捨てしやすい」という実用的な理由が大きい。牛乳パックなどの回収は、環境問題に関心なかった主婦らに目を向けさせた。森住さんの中で、仕組みを勉強することから始まった運動だ。

社会的に強い行政や企業に押しつけてきたとしても、市民運動への批判は慎重でなければならぬ。

二百人分のいすが用意されたのは、三人近い入場者で埋まった。植田さんは「では、何をすればいいの?」と、森住さんは「ボランティア活動は永久に続けられますか?」との質問があり、白熱したやり取りに拍手も交錯した。

議論を聞いた滋賀県環境生協理事長の藤井純子さんは「水きれいに流さないと、牛乳パックや廃食油を身近な問題でさかしたからこそ、関心を持たなければならぬ。牛乳パックの回収は現実にはパルプ製より安い。パック利用の本(じん)なしロールは生協の主力商品にならず、競争力は十分ある。古紙回収業者が減ったのはリサイクル運動が広がったせいではなく、古紙価格が下がって休止している人が多いからである。」と反論している。

この討論会は植田敦氏の出版本や H4.11.15 付けのニッポン消費者新聞への「リサイクルが環境破壊の一因に 牛乳パック、アルミ缶リサイクルの再考を」というタイトルの投稿を受け、滋賀県環境生協によって企画された。ちなみに敦氏の弟である京都大学の植田勲先生は、パック連設立の11の賛同団体の中の「京都使い捨て時代を考える会」に関わっておられ運動への支援をいただいていた。

戦後 80 年の節目を迎えました

今年で 40 年目となる牛乳パック再利用運動は、戦争中、物がなくひもじい苦しい子ども時代を過ごし、さらに終戦 2 日前の 13 日に大月空襲を経験した前代表の平井初美を中心に、物の大切さを子どもたちに伝えたいと大月市から始まった運動です。

平井初美は PTA 時代に「子どもにおくる戦争体験記」の編集に取り組み、当時 12 歳で大月空襲を体験したその手記を体験記に寄稿していますので、いかに物の乏しい大変な時代だったか一部紹介したいと思います。

『新調の服など夢の話で、どの子も「つぎ」の当たったモンペに、古毛糸を二本どりや、つぎ足して編んだセーター、色あせたヨレヨレのおちゃっぱりなど、数少ない衣服をぼろぼろにすり切れるまで身につけていました。持ちものといえば、いもだらけ、豆だらけの弁当が入っている木口の手さげ、肩には防空頭巾、手には木刀といったいでたちでしたが、みな栄養失調でやせて、そそけだったような顔をしていました。それにお盆をもって登校したこともあります。このお盆は軍事訓練や勤労奉仕のほかに、大豆のよりわけ作業があって、その時に使うために持って行ったのです。教室のそこここに、おおきな大豆の袋がおいてあって、グループごとにその袋から大豆をつかんではお盆にのせ、くさった大豆と良い大豆とをより分けるのです。敗戦のみじめさが待ち受けているとも知らず私たちは、おしゃべりに空腹も忘れてより分けを競い合いました。

勉強はそんな作業、訓練の合間をぬって行っていました。テストに使う紙も不足してきて、だんだん小さくなり、手のひらにはいるくらいの薄いそまつな紙になりました。中略

私たちの生活はぎりぎりまで切りつめられて来ました。浴用せっけんは泥と砂とカセイソーダをねりあわせたかのような、ごそごそした泡の出ないものでしたし、洗濯もカセイソーダの結晶を溶かして使ったものです。

銭湯は一浴三十分と時間が制限され、お風呂も洗濯もままならない毎日でしたから、のみ、しらが衣服に毛布にとわがもの顔ではびこり、やせ細った体のとぼしい血まで吸い取ったのです。

食べるものも、飢えをしのぐ程度でしたから校庭はもとより、各家庭の空地や庭はみな野菜づくりや防空壕に姿を変えていきました。夜は夜で灯火管制のもと、顔をつき合わせるようにして、汁ばかりの雑炊をすすり、寝るときはいつでも逃げられるように枕元に非常所持品をおき、足はズックをはいたままという状態で、休むこともままなりませんでした。』

このような暮らしの中、昭和 20 年 8 月 13 日の朝突然に空襲に襲われ、自宅の玄関、並びの 2 部屋は吹き飛ばされ、近所では数名が生き埋めとなって亡くなったそうです。

アメリカ軍の記録の中に攻撃目標を大月と明示しているものはなく、3 隻の空母から飛び立った 61 機が「TOMIHAMA」（大月市内の東寄りの一地域名）という小さな町を攻撃し、80 発超えの爆弾を投下した記録のみが残されているとのことです。また、最初の目標である川崎の東芝工場が厚い雲におおわれていて攻撃できなかったのも、西方向へ進んだところ雲の切れ間から川沿いに大きな工場とダムが見えたので攻撃したとも記載されていて、つまり、当初の目標が攻撃できず抱えている爆弾を捨てるような形で大月が攻撃されたとも考えられると、地元郷土史研究家は語っています。この空襲で 61 名が亡くなり、爆弾が落ちた女学校の生徒 20 名を含む 37 名が未成年でした。

このような凄惨な体験を経てたどりついた牛乳パックのリサイクルは、単に環境保護を目的にした運動ではなく、平和であるからこそ緑が守れ、子どもたちを守ることにつながるという基本理念があることをご理解いただきたいと思います。